新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻上翻刻

駒井信勝
別所弘淳
松本亮太

一、はじめに

智山伝法院では、宗祖弘法大師ご誕生千二百五十年慶讃事業の一環として『十巻章』（以下、慶讃版『十巻章』）を製作し、令和五年三月に出版した。この慶讃版『十巻章』製作に当たって使用した、智山書庫所蔵の堅康本・弘現本・覚本本の読みは、中性院俊音房頼瑜（一二二六～一三〇四）を起点としながらも、智山第七世元春房運敞（一六一四～一六九三）の影響を強く受けたものであると考えられる。このことは、例えば堅康本・弘現本・覚本本の『菩提心論』の奥書から読み取ることができる。

永仁三年（甲午）十二月十二日於中性院一部十巻私意楽任点畢是偏為初心末学歟後賢刊定而已／南山隠老
権律師　頼瑜（春秋／六十九）／／

天文十三年八月十五夜点畢中性院頼瑜御正本申請点之後学縦声仮名之不審雖有之不可直二三遍／校合了　純亮／／

寛永四年（丁卯）九月十五日写点了　正運　賢秀／／

慶安元年五月念日旧点校合以墨（朱）加之（今以朱点之）　安楽寿院沙門運敞／／[1]

この奥書によれば、頼瑜が初心の学徒のために加点した本を純亮（生没年不明）が写し、また純亮の本に従って賢秀（生没年不明）も書写を行っている。そして、賢秀の本に基づいて運敞が校合してその点を墨書きにて加えている。この墨書きを、堅康本・弘現本・覚本本では、朱書きにて表記しているのである。したがって、堅康本・弘現本・覚本本は、頼瑜の読みを起点としながらも、校合を行った運敞の読みが多分に反映されたものと判断することができる。

さて、今回の慶讃版『十巻章』製作では、『秘蔵宝鑰』のみしか現存していないことを主な理由として、敢えて使用を避けた史料がある。それが新文庫に所蔵される『秘蔵宝鑰』である。[2] この『秘蔵宝鑰』の奥書には次のように記されている。

【巻上　奥書】

（御本云）永仁二年三月二日於南山私之意楽任点畢　頼一（春秋／六十（十九歟））／／

天文十三年五月二日於根来寺以中性院御正本点了　純亮／／

寛永四年（丁卯）九月三日子貝写点了[3]　正運　賢秀／／[4]

【巻中　奥書】

（御本云）永仁二年九月二日於中性院一部十巻私意楽任点畢是偏為初心／末学歟後賢刊定而已　南山隠老権

律師頼瑜（春秋／六十九）／／
天文十三年三月十七日以御正本朱墨点畢　純亮／／
寛永四年（丁卯）八月十三日写点訖　正運　賢秀／／(5)

【巻下　奥書】

（御本云）永仁二天（甲午）九月八日於紀州根来寺中性院一部十巻私意楽任点是偏為初心末学／歟後賢刊定而已　南山隠老権律師頼瑜（春秋／六十九）／／
天文十三年六月十七日於根来寺以中性院（頼一）御正本朱墨点畢後学／設不審雖有之不可直　純亮房／／
寛永四年（丁卯）八月十九日以右本点訖　正運　賢秀／／(6)

このように、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の奥書には、堅康・弘現・覚本の奥書と同様に、「頼瑜」・「純亮」・「賢秀」の名が記されている。また、運敞の校合が行われる以前のものであるため、頼瑜由来の読みが、より反映されたものであると考えられるのである。

このことは、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の各巻表紙裏に書かれた識語からも読み取ることが可能である。各巻の識語を示せば次のとおりである。

【巻上　表紙裏】

墨点声仮名朱引朱ノ句切朱導　頼一御本也／／
朱点声仮名以別本写之　是又根来寺点也／／

【巻中　表紙裏】

墨声墨仮名并点朱引朱ノ導朱ノ句切　頼一御点也／／

朱点朱仮名朱声以別本点了　是亦根来寺点也／／

【巻下　表紙裏】

墨点墨声并仮名朱引朱導朱ノ句切　（頼―）御本也／／

朱声朱仮名。朱点以別本之根来点写之／／

すなわち、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』は、頼瑜の訓点が記されるのみならず、根来寺の訓点をも付す、大変貴重な史料といえる。(7)

そのため、頼瑜が著した『秘蔵宝鑰』の注釈書である『秘蔵宝鑰勘註』にみられる読みと、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に付された運敞校合以前の読み、運敞が著した『秘蔵宝鑰』の注釈書である『秘蔵宝鑰纂解』にみられる読み、堅康本『秘蔵宝鑰』にみられる運敞校合以降の読みとを比較することで、堅康本『秘蔵宝鑰』に反映された読みに至るまでの変遷を明らかにすることができるのではないかと期待される。そこで、この検討を行う基礎作業として、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の翻刻作業を行うこととした。

さて、本稿では、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻上の翻刻報告を行う。また、頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』(8)、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻上、運敞『秘蔵宝鑰纂解』(9)、堅康本『秘蔵宝鑰』とで相違する読みをいくつかピックアップし、読みの変遷についての検討も行う。この読みの変遷を検討することで期待される成果は、以下の三点である。

① 頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』と新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点とを比較することで、頼瑜の著作から読み取ることができる「頼瑜の読み」と、賢秀に伝承された「頼瑜の読み」に異同があるのかどうかを明らかにすることができる。

② 新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点・根来点と運敞『秘蔵宝鑰纂解』とを比較することで、運敞が校合する際

に頼瑜点をどれ程重要視していたのかを明らかにすることができる。

③ ②を踏まえたうえで、堅康本『秘蔵宝鑰』の読みと比較することで、運敞以降の智積院における「十巻章」の修学においては、頼瑜点、根来点、運敞の読みのいずれが重要視されていたのかを明らかにすることができる。

二、書誌情報

新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の書誌情報は次のとおりである。

史料名：秘蔵寶鑰　員数：三帖　資料番号：新文庫蔵五八八番（み―96）

第一帖

版本。粘葉装。法量縦二五・二糎×横一五・八糎。一九丁。頁六行、一行一七字。無界。書入（墨・朱）・仮名（墨・朱）・返点（墨・朱）・声点（墨・朱）・朱合符・朱引・朱区切点アリ。虫損アリ。料紙は楮紙（装飾：具引）。表紙素紙。

外題（直書、表紙左上）「秘藏寶鑰巻上」表紙右上「五地函」、外題右「秘蔵寶鑰巻上」

表紙裏「墨点声仮名朱引朱ノ句切朱導　頼―御本也

朱点声仮名以別本写之　是又根来寺点也」

内題「秘蔵寶鑰巻上」

尾題「秘蔵寶鑰巻上」

奥書「（御本云）永仁二年三月二日於南山私之意楽任点畢　頼―（春秋／六十（十九歟））

天文十三年五月二日於根来寺以中性院御正本点了　純亮
寛永四年（丁卯）九月三日子貝写点了　正運　賢秀」

印記（一丁右下、朱方印陽刻複廓）「妙智院」（縦五・〇糎×横二・〇糎）

第二帖

版本。粘葉装。法量縦二五・〇糎×横一五・七糎。二八丁。頁六行、一行一七字。無界。書入（墨・朱）・仮名（墨・朱）・返点（墨・朱）・声点（墨・朱）・合点（墨・朱）・朱合符・朱引・朱区切点アリ。虫損アリ。料紙は楮紙（装飾：具引）。表紙素紙。

外題（直書、表紙左上）「秘蔵寶鑰巻中」表紙右上「五地函」

表紙裏「墨声墨仮名并点朱引朱ノ導朱ノ句切　頼―御点也
朱点朱仮名朱声以別本点了　是亦根来寺点也」

内題「秘蔵寶鑰巻中」

尾題「秘蔵寶鑰巻中」、尾題左「奉報　大師之遺恩為遂現當之／心願謹以開印板矣」

奥書「（御本云）永仁二年九月二日於中性院一部十巻私意楽任点畢是偏為初心／末学歟後賢刊定而已　南山隠老権律師頼瑜（春秋／六十九）
天文十三年三月十七日以御正本朱墨点畢　純亮
寛永四年（丁卯）八月十三日写点訖　正運　賢秀」

印記（一丁右下、朱方印陽刻複廓）「妙智院」（縦五・〇糎×横二・〇糎）

第三帖

版本。粘葉装。法量縦二五・一糎×横一五・七糎。三四丁。頁六行、一行一七字。無界。書入（墨・朱）・仮名（墨・朱）・返点（墨・朱）・声点（墨・朱）・朱合符・朱引・朱区切点アリ。虫損アリ。料紙は楮紙（装飾：具引）。表紙素紙。

外題（直書、表紙左上）「秘蔵寶鑰巻下」表紙右上「五地函」

表紙裏「墨点墨声并仮名朱引朱導朱ノ句切　（頼―）御本也
　　朱声朱仮名。朱点以別本之根来点写之」

内題「秘蔵寶鑰巻下」

尾題「秘蔵寶鑰巻下」

奥書「（御本云）永仁二天（甲午）九月八日於紀州根来寺中性院一部十巻私意楽任点是偏為初心末学／歟後賢
　　刊定而已　南山隠老権律師頼瑜（春秋／六十九）
　　天文十三年六月十七日於根来寺以中性院（頼―）御正本朱墨点畢後学／設不審雖有之不可直　純亮房
　　寛永四年（丁卯）八月十九日以右本点訖　正運　賢秀」

印記（一丁右下、朱方印陽刻複廓）「妙智院」（縦五・〇糎×横二・〇糎）

三、本文に付される記号について

《返り点》

漢文を訓読する際に、原文の字順とは異なる順で下から上に返って読むことを示すための記号である。新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』においても、レ点、一二点、上中下点などが用いられている。ただし、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』

で使用される返り点には、一部現行の用法とは異なるものもみられる。現行の用法では一字を返読する際は主にレ点、二文字以上返るときは一二点を用いるが、本史料では一字返読の際にも一点が用いられる事例が散見される。例えば、「如是」を「是の如く」と訓読する際、現行の用法では「如レ是」と表記されるが、本史料では「如是二」と表記され、この場合の多くは二点が表記されない。

また、文字の左側の中央に「、」が記されている箇所がある。これも返り点の表記の一種であると思われる。用例を見ると、一二点の一点などから返読し、さらに上の文字に返って読む文字に付されている。例えば、「未だ三界を離れず」と訓読する場合、現行の用法では、「未レ離二三界一」と表記されることが多いが、本史料では「未離三界二」と表記されたり、「出離す可きこと難し」と訓読する「難レ可二出離一」が「難可出離二」と表記される。

《合符》

主に文字と文字の間に記される縦線のことを合符と呼ぶ。新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』では頼瑜点のみにみられ、朱書きによって記されている。左側に付されたものを「訓合符」と呼び、訓読みすることを示す。また、中央や右側に付される合符は「音合符」と呼び、音読みすることを示す。この音合符のうち、中央に付されたものは「呉音読み」、右側に付されたものは「漢音読み」を示している。例えば、「牛狗（ごく）」と呉音で読む場合は中央に記され、「牛頭（ぎゅうとう）」と漢音で読む場合は右側に記される。ただし、中央に記される合符に関しては、単に熟語を示すために記されたようなものもあり、必ずしも呉漢の読み分けを目的として付されたものではない。

《区切り点》

本文中に記されている「●」の記号は、文章の区切りを示す点である。文字の下側中央、或いは右寄りに記される。現代の文章において読点「、」や中黒「・」が付されるような箇所では中央に付され、句点「。」のように

文章の区切りを示す箇所では右寄りに点が付される傾向がある。この区切り点も合符と同様、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』では頼瑜点のみにみられ、朱で記されている。

《声点》[10]

漢字の傍らに記されている「〇」の記号を声点という。もともとは五世紀頃の中国の言語文化の中で、漢字の声調（アクセント）に四種の違いがあることが認識され、「四声」として分類された。この四声を示すために文字の四隅に付けられた記号を四声点という。四声点は順に、左下「平声」、左上「上声」、右上「去声」、右下「入声」を示す。日本においてもこの四声の体系が導入され、平安時代中期頃の文献ではじめて見られるようになる。

各声の音調は、平声は低く平らな音調、上声は高く平らな音調、去声は低から上へ上昇する音調、入声は低く平らで語尾がつまる音調とされる。関西弁で「茶碗天目」と発声する際の、茶が平声、碗が上声、天が去声、目が入声の音調に相当すると古来より伝えられている。各声の音調を博士で示すと、平声は角、上声は徵、去声は角徵、入声は角となる。

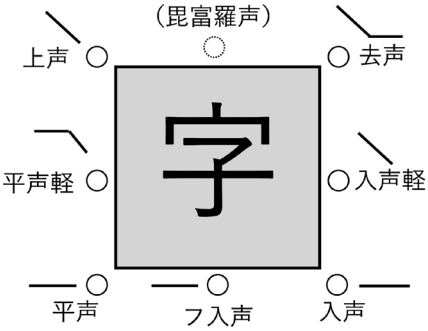
日本においては、中国の純粋の四声点に加え、いくつか声点が追加される。まず、文字の下側中央に点を付したものを「フ（不）入声」という。中国の四声では、語尾がｐｔｋのような内破音で終わる短くつまる語が入声と分類されていた。それらは日本語で発音すると語尾が「フ・ツ・ク・チ・キ」となるものであるが、その中で語尾が「ツ・ク・チ・キ」となるものを入声とし、語尾が「フ」となるものをフ入声として、別に分類した。例えば、入声にあたる語として「滅」「釈」「八」「識」等が挙げられる。フ入声にあたる語として「法」や「執」等がある。これらは古い仮名表記ではそれぞれ「ホフ」「シフ」となる語である。したがって「諸法（しょほう）」というときは「法」の下側の中央に点が付されるが、「法身（ほっしん）」と読むときは「法」の右下に点が付される。なお、声調は

平声や入声と同じく、低く平らに発音され、博士では角の音で示される。

次に、文字の左中央に点を付したものを「平声軽（かる）」という。平声軽は「押したる声」といい、始めを高く後を低く発声する語である。博士では徴角と示される。また、文字の右中央に点を付したものを「入声軽」という。入声軽は語尾が入声と同様「ツ・ク・チ・キ」となるものであるが、上声と同じく高く発声される語である。博士では徴で示される。

この他にも上部中央に点を付した「毘富羅声」があり、上声と同じく高く唱える声といわれ、天台宗や法相宗では用いられている。しかし、高野や根来では上声と区別しないため、毘富羅声は用いられない。

以上のように新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』においても「平声」「上声」「去声」「入声」の四声に「フ（不）入声」「平声軽」「入声軽」を加えた七声の体系による声点が見られる。声点の位置と博士の関係は図の通りである。



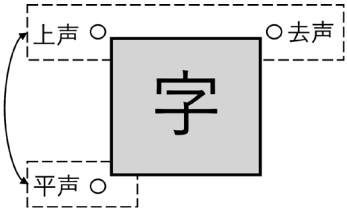
また、声点は漢字の清音・濁音を区別する際にも使用される。○が一つで表記されるものは清音で、○が二つ並んで表記されるものは濁音で読むことを示している。横に二つ並んだ表記の濁音を「本濁」といい、本来濁って読む文字に付される。例えば、「仏道」などである。竪に二つ並んだものは「新濁」といい、本来清音に読む字であるが、上に来る文字との関連によって、音便上濁って読む文字に付される。例えば、「衆生」の場合、「生」の字は本来清音で読む字であるが、上の字との関連により「ジョウ」と濁って読むため、新濁で表記される。

さらに、声点の付される位置が漢音と呉音とでは異なることが多いため、声点により漢音読み・呉音読みの判

別をすることも可能である。例えば、「聖人」の場合、漢音では「聖人（せいじん）」と読み、呉音では「聖人（しょうにん）」と読む。漢音の「せいじん」の声点は、「聖」には去声に付き、「人」には平声に付く。呉音の「しょうにん」の声点は、「聖」には平声に付き、「人」には去声に付く。このように入声を除いて、同じ文字を漢音で読む場合と呉音で読む場合では、四声点が上下で逆になることが多い。要するに、漢音の平声の字を呉音で読む場合は上声か去声になり、漢音の上声や去声の字を呉音で読めば、平声となるという具合である。[11] ただし入声（フ入声）については、漢音であれ呉音であれ、声点の位置が入れ替わることはない。

また、文字が連続する場合、上声或いは去声の文字の下に去声の文字がくると、下の去声の文字の四声は上声に変化するという法則がある。例えば、「言説」といった場合、「言」の字は去声であるので四声点は去声に付されるが、「真言」というように去声の字「真」の下に来た場合、「言」の字の四声点は上声に付される。

以上、基本的な声点の法則を示したが、声点によって当時のアクセントを正確に把握しようとすることは不可能に近い。[12] しかし、声点が付されていることによって、入声・フ入声の違い、清濁、呉音・漢音の区別など、読み方を判別するための情報を得ることができる。



多くの場合、呉漢で四声の上下が反対になる

四、凡例

1　本稿は新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の本文に書き加えられた、ルビ、送り仮名、返り点、合符、声点等の「訓読

のための加点」の翻刻である。

2　原則として、原本において黒色で記されている文字や記号は黒色、朱で記されているものは灰色で示した。（黒、朱の区別については、第一節に示した各巻の表紙裏の識語参照）

3　声点が同一箇所に黒と朱の両方記されている場合、例外として●で示した。

4　返り点、合符、声点などの記号については、つとめて原本に記されている位置と同様の位置に示した。（各記号の意味については前節参照）

5　史料中に文字や記号の所在が確認できるが、虫損や汚れにより判読が困難な箇所には□を記した。

6　返り点について、現代の用法とは異なる使用例が見られるが、原本の表記通りに示した。

7　比較の便宜のため、体裁は慶讃版『十巻章』【本文編】に合わせた。原本の改頁の位置には＊を付し、丁数を下部に記した。

8　原本では本文の漢字について旧字・略字・異体字が混用されているが、すべて常用漢字に改めた。

9　新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に表記されている漢字と、慶讃版『十巻章』で使用されている漢字が異なる箇所には、下部に※にて異同を記した。

例…新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』「花」　慶讃版『十巻章』「華」　※花…華

10　冂・匕・メなど略字仮名は現行の字体に改めた。

五、本文

秘蔵宝鑰巻上

并序

沙門遍照金剛撰

悠悠悠悠太悠悠　内外縑緗千万軸

杳杳杳杳甚杳杳　道云道云百種道

書死諷死本何為　不知不知吾不知

思思思思聖無心　牛頭嘗草悲病者

断菑機車愍迷方　三界狂人不知狂

四生盲者不識盲　生生生生暗生始

死死死死冥死終

至如空花眩眼亀毛　迷情謬著実我酔心封執渇鹿野馬奔於

塵郷狂象跳猿蕩於識　都遂使十悪快心日夜作六度逆耳不

＊一丁右

＊一丁左

※花…華

※猿…猨

入心謗人謗法不顧焼種之辜耽酒耽色誰覚後身之報闇魔
獄卒構獄断罪餓鬼禽獣焔口挂体輪廻三界跨跰四生
大覚慈父観此何黙是故設種種薬指種種迷意在此歟於焉
修三綱五常則君臣父子之道有序不乱習六行四禅則厭下
欣上之観勝進得楽唯※蘊遮我八解六通因縁修身空智抜種
無縁起悲唯識遺境則二障伏断四智転得不生覚心独空慮
絶則一心寂静不二無相観一道於本浄観音熙怡念法界於
初心普賢微咲

心外礦垢於此悉尽曼荼荘厳是時漸開摩吒恵眼破無明之
昏夜日月定光現有智之薩埵五部諸仏擎智印森羅四種曼
荼住法体駢填阿遮一睨業寿之風定多隷三喝無明之波涸

*二丁右

※蘊…蘊

*二丁左

※摩…麼

*三丁右

八供天女起雲海於妙供四波定妃受適悦於法楽十地不能
窺窾三自不得歯接秘中之秘覚中之覚
吁吁不知自宝狂迷謂覚非愚而何考慈切心非教何済投薬
在此不服何療徒論徒誦医王呵叱爾乃九種心薬払外塵而
遮迷金剛一宮排内庫而授宝楽不楽得不得自心能為非哥
非社我心自証而已求仏薩埵不可不知摩尼燕石驢乳牛酬
不可不察不可不察住心深浅経論明説具列如後
頌曰
帰命金剛内外寿
離言垢過等空因
作遷慢如真乗寂
制体旗光蓮貝仁
日幢華眼鼓勃駄
金宝法業歌舞人

*三丁左

*四丁右

捏鋳尅※業威儀等
我今蒙詔撰十住
褒霧見光無尽宝
載祖求伽梵
已聴住心数
請開彼名相

丈夫無礙過中刹塵
頓越三妄入心真
自他受用日弥新
幾郵到本床
如来明説此
心名後明列
十種入金場
諷読悟迷方

第一異生羝羊心
第二愚童持斉※心
第三嬰童無畏心
第四唯蘊※無我心

凡夫狂酔
但念婬食
由外因縁
施心萌動
外道生天
如彼嬰児
唯解法有
羊車三歳

不悟吾非
如彼羝羊
忽思節食
如穀遇縁
暫得蘇息
犢子随母
我人皆遮
悉摂此句

※尅…剋
※斉…齋
＊四丁左
※蘊…蘊

第五拔業因種心　修身十二業生已除無明拔種無言得果

第六他縁大乘心　無縁起悲幻影観心大悲初発唯識遮境

第七覚心不生心　八不絶戲心原空寂一念観空無相安楽

第八如実一道心　一如本浄知此心性境智俱融号曰遮那

第九極無自性心　水無自性法界非極蒙警忽進遇風即波

第十秘密荘厳心　顕薬払塵秘宝忽陳真言開庫万徳即証

第一異生羝羊心

異生羝羊心者何凡夫狂酔不弁善悪愚童癡暗不信因果之

*五丁左

*五丁右

名也。凡夫作種種業感種種果身。相万種而生。故名異生。愚癡無智。均彼羝羊之劣。弱。故以喩之。

夫生。非吾好死。非亦人悪。然猶生之生之輪。転六趣。死去死去沈淪三途。生我父母。不知生之由。来受生我身*亦不悟死之所去。顧過去冥冥。不見其首臨未来漠漠。不尋其尾。三辰戴頂暗去。狗眼五獄載足迷似羊目。営営日夕。繋衣食之獄。趁逐遠近墜名利之坑。加以磁石。吸鋼則剛柔馳逐。方諸招水則父子相親。父子親親。不知親之為親夫。婦相愛。不覚愛之為愛。流水相続。飛燄相助。徒縛妄想之縄空酔無明之酒既如夢中之遇還似逆旅之逢泊如一。二従道而展生万物因三而森羅自在能生。梵天所作。未知生。人之本誰談死者之起。

*六丁右

*六丁左

遂乃豺狼猴虎咀嚼於毛物鯨鯢摩竭呑獡於鱗族金翅食龍
羅刹喫人人畜相呑強弱相噉況復弓箭亘野猪鹿之戸絶種
網罠籠沢魚鼈之郷滅族鷹隼飛而驚鵠流涙敖犬走而狐兎
断腹禽獣尽心未飽厨屋満舌不厭強窃二盗迷珍財而受戮
和強両奸惑娥眉而殺身四種口業任舌作斧三箇意過縦心
自毒無慚無愧八万之罪尽作自作教他塵沙之過常為都不
覚知一一罪業招三悪之苦一一善根登四徳之楽
有云人死帰気更不受生如此之類名断見有云人常為人畜
常為畜貴賤常定貧富恒分如此之類名常見或持牛狗戒或
投死恒河如此之類曰邪見邪見外道其数無量不知出要祖
習妄見如是等類皆悉羝羊之心也

※猴…狻
*七丁右
※敖…獒
※兎…新文庫本では「兔」のヽがムレ
※腹…腸
※娥…蛾
*七丁左
*八丁右

頌曰　四韻

凡夫盲善悪　不信有因果
無羞造十悪　空論有神我
問依何経建立此義　答大日経也
生死愚童凡夫執著我名　我有分別無量我分秘密主
観我之自性則我我所生余復計有時地等変化瑜伽我建立
浄不建立無浄乃至声非声秘密主如是等我分自昔以来分
別相応希求順理解脱秘密主愚童凡夫類猶如羝羊
龍猛菩提心論云謂凡夫執著名聞利養資生之具務以安身
恣行三毒五欲真言行人誠可厭患誠可棄捨

但見眼前利　何知地獄火
執著愛三界　誰脱煩悩鎖

*八丁左

*九丁右

第二愚童持斎心

夫禿樹非定禿遇春則栄華増久何必氷入夏則泮注穀牙待
湿卉菓結時至如戴淵改心周処忠孝上礦石忽珍魚珠照夜物
無定性人何常悪遇縁則庸愚庶幾大道順教則凡夫思斉賢
聖羝羊無自性愚童亦不愚
是故本覚内薫仏光外射欲爾節食数数檀那牙種疱葉之善
相続而生敷花結実之心探湯不及
五常漸習十善鑽仰言五常者仁義礼智信仁名不殺等恕己
施物義則不盗等積而能施礼曰不邪等五礼有序智是不乱
等審決能理信不妄之称言而必行能行此五則四序玉燭五
才金鏡国行之則天下昇平家行之則路不拾遺挙名顕先之

※花…華

*九丁左

*十丁右

妙術保国安身之美風外号五常内名五戒名異義融行同益
別断悪修善之基漸脱苦得楽之濫觴故経云下品五戒生贍
部洲中品五戒勝身国上品牛貨上上及無我鬱単越広説之
四洲人民各有王者王有五種粟散四輪王此五種王必乗十
善而来御故仁王経云十善菩薩発大心長別三界苦輪海中
下品善粟散王上品十善鉄輪王習種銅輪二天下銀輪三天
性種性道種堅徳転輪王七宝金輪四天下
今案此文王者及民必行五戒十善得生人中未有棄此能得
前生修善今生得人此生不修還墜三途春種不下秋実何獲
善男善女不可不仰不可不仰十悪十善之報聖王凡王之治
具如十住心論

*十一丁右

*十丁左

頌曰（ニク）　三韻

愚童少解（スコシキトテ）貪嗔毒（ヲ）
欵（コツ）爾（シニ）思惟（ス）持斎（ノ）美（ヲ）
種子（ニ）内熏（シテ）発（シ）善心（ヲコシ）
牙疱（ケハウ）相続（シテタトフエイ）尚英（ク井ヲ）軌（ニ）

＊十一丁左

五常十善漸（ニ）修習（ス）
粟散（ト）輪王（ト）仰（ク）其旨（ヲ）

問此（ノ）住心（ハ）亦依（テカレノ）何経（ニ）説（ク）答大日経（ナリ）彼経（ニ）何説（ク）経云（ク）愚童凡夫（ハル）或
時有（ニハリ）一法（ノ）想生（スルコト）所謂（ル）持斎（ナリ）彼思（シテ）惟此（ノ）少分（ヲ）発起（シテ）歓喜（ヲ）数数（ソクニ）修習（ス）
秘密主是（レ）初（ノ）種子（ノ）善業（ノ）発生（スルナリ）復以（テ）此（ヲ）為因（シテ）於六（ノ）斎日（ヒニ）施与（ス）父母
男女親戚（シヤクニ）（シキ）是（レ）第二（ノ）牙種（ナリ）復以（ノ）此（ヲ）施授（ス）与非（ノ）親識（ニ）者是（レ）第三（ノ）疱種（ナリ）
復以（ノ）此（ヲ）施与（フ）器量（ノ）高徳（ニ）者（ヒトニ）是（レ）第四（ノ）葉種（ナリ）復以（ノ）此（ヲ）施（ヲ）歓喜（シテ）授与（シ）伎（ノ）
楽人（ニ）等（ニ）及（ヒ）猷尊（コンスル）宿（ニ）是（レ）第五（ノ）敷花（ナリ）※復以（テ）此（ノ）施（ヲ）発（シテ）親愛（ノ）心（ヲ）而供（ス）養之（ヲ）
是（レ）第六（ノ）成果（ナリ）

＊十二丁右

※花…華

第三嬰童無畏心

*嬰童無畏心者外道厭人凡夫欣天之心也雖云上生非想下

住仙宮身量四万由旬寿命八万劫厭下界如瘡瘢見人間如

蜉蝣光明蔽日月福報超輪王然猶比彼大聖劣弱愚※蠓似此

咳児脱小分厄縛故無畏未得涅槃楽故嬰童

問聞導淮犬高踏費龍遠飛並是薬力所致師術所為今此天

等依何教就誰師能得如是自在光明身寿命長遠楽又天有

幾種請示其名高問来叩鐘谷何黙嘗試論之夫狂毒不自解

医王能治摩尼不自宝工人能瑩所謂医王工人豈異人乎我

大師薄伽梵其人也如来徳具万種一一徳即一法門之主也

*十二丁左

*十三丁右

*十三丁左

※蠓…朦

従彼一一身随機根量説種種法度脱衆生故大日経云如来応供正遍知得一切智智為無量衆生広演分布随種種趣種種性欲種種方便道宣説一切智智或声聞乗道或縁覚乗道或大乗道或五通智道或願生天或生人中及龍夜叉乾闥婆乃至説生摩睺羅伽法云云 今依此文三乗及人天乗教並皆

*十四丁右

如来所説若依教修行者必生天上

問若然者諸外道等所行皆是仏法歟答此有二種一合二違

合者契合如来所説故違者違乖仏説故雖云元是仏説然無始時来展転相承違失本旨或随自見持牛狗等戒以求生天

*十四丁左

如是之類並失本意

問若是仏説者宜直説仏乗等何用説天乗等機根契当故余

薬無益故。

問已聞師及教請示天数天有三種謂欲色無色界是初欲界有六天四天王忉利夜摩都史楽変化他化是也色界有十八此有四別四禅各別故初禅有三梵衆梵輔大梵是二禅有三少光無量光極光浄是三禅又三少浄無量浄遍浄是也第四禅有九無雲福生広果無想無煩無熱善見善現色究竟是也無色界有四空無辺識無辺無処有処非想非非想是也此是廿八種天去海遠近身量大少寿命長短等具如十住心論恐繁不述。

問既聞天名数重請示彼行相答諸外道等亦立三宝三学等名梵天等為覚宝四吠陀論等為法宝伝授修行者為僧宝十

*十五丁右

※処…所

*十五丁左

※少…小

善等為戒四禅那即定此定由六行而得六行者言苦麁障浄妙離是厭下界作苦麁障想欣上天作浄妙離観由此観故展転上生由他主空三昧空恵発生由此三学得上天妙楽雖然道非究竟故不能出生死得涅槃上射非想還墜地獄譬如箭射虚空力尽即下是故不可楽求

問諸外道同修三学生彼二界証空三昧言亡慮絶何由不得

断煩悩証涅槃答観著二辺定帯二見故

問同観非有非無何堕二辺二見乎繋属他主不知因縁中道故

因縁中道其意云何観因縁有故不堕断辺観自性空故不墜常見観有空即法界則得中道正観由此中道正観故早得涅

＊十六丁右

＊十六丁左

槃外道邪見人不知此義是故不得真円寂若聞此理即得羅漢

問護戒生天有幾種生天有四種一外道如前説二乗亦生天上三大乗菩薩必為十天王故四応化諸仏菩薩化作天王故具如十住心論説

頌曰

外道発心願天楽虔誠持戒覓帰依

不知大覚円満者豈悟梵天龍尊非

六行修観生無色身心五熱徒自機

断常空有願勝住若遇世尊覚我違

問今此住心亦依何経論解説答大日経菩提心論彼経何説

*十七丁右

*十七丁左

彼経云秘密主彼護戒生天是第七受用種子復次秘密主以
此心生死流転於善友所聞如是言此是天大天与一切楽者
虔誠□供養一切所願皆満所謂自在天梵天那羅延天商羯羅
天自在天子日天月天龍尊等乃至或天仙大囲陀論師各各
応善供養彼聞如是心懐慶悦慇重恭敬随順修行秘密主是
名愚童異生生死流転無畏依第八嬰童心

＊十八丁右

※善…普

又云復次殊勝行随彼所説中殊勝住求解脱恵生所謂常無
常空随順如是説秘密主非彼知解空非空常断非有非無俱
彼分別無分別云何分別空不知諸法空非彼能知涅槃是故
応了知空離於断常解云外道願出要種種苦身心断常空有
教如構角求乳若知因縁空忽爾得解脱

＊十八丁左

又云秘密主世間因果及業若生若滅繫属他主空三昧生是

＊十九丁右

名(ク)世間(ノ)三昧道(ト)。

又云。若(シ)諸天世間(ノ)真言法教(ノ)道(モハ)如是(シ)勤勇(ゴン)者(スルモ)為(ノ)利衆生(センカヲ)故(ナリト)。

龍猛菩薩(ノ)菩提心論(ニ)云(ク)。諸(ノ)外道等(ハ)恋(ヲシテ)其(ノ)身命(ヲ)或(ハ)助(ルニ)以(テシ)薬物(ヲ)得仙。宮住(ノニ)寿(スルコトヲ)。或(ハ)復生(スルヲ)天(ニ)。以(テ)為(ス)究竟(ト)。真言行人(シ)応(ス)観彼等(ヲ)業力若尽(シ)未(ヌレハタ)離(レ)三界(ヲ)煩悩尚(ヲ)存(セリ)。宿殃(アウ)未(タ)殄(ホロヒ)悪念(センシテ)旋起(シテ)。当(テ)彼(ノ)之(ニ)時(ニ)沈淪(シテ)苦海(ニ)難(シ)可出離(スニ)当(ル)知外道(ノ)之法(ハ)。亦(タ)同(シキ)幻夢(ト)陽焔(ニトニ)也(ナリ)。

＊十九丁左

秘蔵宝鑰巻上

六、分析ノート

これより以下は、頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』、運敞『秘蔵宝鑰纂解』、堅康本『秘蔵宝鑰』とを比較し、その中で相違する読みをいくつかピックアップして、次の二つの表から検討を試みる。

表(1)は、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』において頼瑜点・根来点が併記されている箇所を抽出したものである。表(2)は、堅康本『秘蔵宝鑰』において朱書きが加えられている箇所を抽出したものである。

(一) 表(1)について

表(1)は、頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みと、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に示される頼瑜点の読みの異同を検討するものである。この検討によって、頼瑜の著作から読み取ることができる「頼瑜の読み」と、賢秀に伝承された「頼瑜の読み」に異同があるのかどうかを明らかにすることができるであろう。

さらに、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点・根来点と運敞『秘蔵宝鑰纂解』とを比較することで、運敞が校合した際に頼瑜点をどれ程重要視していたのかを明らかにすることができるであろう。

表(1)

	賴瑜『秘蔵宝鑰勘註』	新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』	運敞『秘蔵宝鑰纂解』	堅康本『秘蔵宝鑰』
1	塵郷に奔り	賴：塵郷に奔り 根：塵郷に奔せ	塵郷に奔り	塵郷に奔り
2	唯識境を遣れば	賴：唯識境を遣れば 根：唯識に境を遣れば	唯識境を遣れば	唯識境を遣れば
3	族(やから)を滅ぼす	賴：族(やから)を滅ぼす 根：族(ぞく)を滅ぼす	族(やから)を滅ぼす	族(やから)を滅ぼす
4	舌には厭わず	賴：舌には厭わず 根：舌には厭(あきた)らず	舌には厭わず	舌には厭わず
5	眼前の利のみを見る	賴：眼前の利をのみ見る 根：眼前の利をのみ見て	眼前の利のみを見る	眼前の利を見る
6	名聞・利養・資生の具に執着して	賴：名聞・利養・資生の具に執着して 根：名聞・利養・資生の具とに執着して	名聞・利養・資生の具に執着して	名聞・利養・資生の具に執着して
7	身を安ずるの美風なり	賴：身を安ずるの美風なり 根：身を安くするの美風なり	身を安ずるの美風なり	版：貪瞋の毒を解して 身を安ずるの美風なり
8	貪瞋の毒を解(げ)して	賴：貪瞋の毒を解(さと)って 根：貪瞋の毒を解して	貪瞋の毒を解して	朱：貪瞋の毒を解って
9	下界を厭うこと瘡瘡の如く、 人間を見ること蜉蝣の如し	賴：下界を厭うこと瘡瘡の如くし、 人間を見ること蜉蝣の如くす 根：下界を厭うこと瘡瘡の如く、 人間を見ること蜉蝣の如し	下界を厭うこと瘡瘡の如く、 人間を見ること蜉蝣の如し	下界を厭うこと瘡瘡の如く、 人間を見ること蜉蝣の如し
10	如来の徳は万種を具す	賴：如来の徳は万種を具し 根：如来の徳は万種を具したまへり	如来の徳は万種を具す	如来の徳は万種を具せり
11	然れども無始の時より	賴：然も無始の時より 根：然れども無始の時より	然れども無始の時より	然も無始の時より
12	本旨を違失せり	賴：本旨に違失せり 根：本旨を違失せり	本旨を違失せり	本旨を違失せり

13	譬えば箭を虚空に射るに 力尽きて即ち下（くだ）るが如し	頼：譬えば箭をもて虚空を射るに 力尽きぬれば即ち下るが如し 根：譬えば箭をもて虚空を射るに 力尽きぬれば即ち下（お）つるが如し	譬えば箭を虚空に射るに 力尽きて即ち下るが如し	版：譬えば箭を虚空に射るに 力尽きて即ち下るが如し 朱：譬えば箭を虚空に射るに 力尽きぬれば即ち下つるが如し ※弘現朱：譬えば箭の虚空に射るに 力尽きぬれば即ち下つるが如し
14	同じく非有非無を観ず	頼：同じく非有非無を観ず 根：同じく非有非無と観ず	同じく非有非無を観ず	同じく非有非無を観ず
15	有空即ち法界なりと観ずれば	頼：有空即ち法界なりと観じて 根：有空即ち法界と観れば	有空即ち法界なりと観ずれば	有空即ち法界なりと観ずれば
16	生死に流伝するに	頼：生死に流伝して 根：生死に流伝する	生死に流伝するに	生死に流伝するに
17	未だ殄びず悪念旋起す	頼：未だ殄びずして悪念旋起して 根：未だ殄びざれば悪念旋って起こる	未だ殄びず悪念旋起す	未だ殄びず悪念旋起す

頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みと新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の読みを比較すると、次のようになる。

（1）頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みと新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点の読みが同じもの：1.2.3.4.6.7.14

（2）頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みと新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の根来点の読みが同じもの：8.9.11.12.

（3）頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みが新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点・根来点の読みのいずれとも異なるもの：5.10.13.15.16.17

（1）をみると、頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みと新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点と同じ読みをするものは七箇所ある。対して、（2）（3）のように、頼瑜点と相違する読みをするものは十箇所ある。このように、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に付される頼瑜点は、頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みとは異なるものが多数あるため、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に付される頼瑜点は、あくまでも「賢秀に伝承された頼瑜の読み」であるといえる。

次に、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』と運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みを比較すると以下のようになる。

①新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点の読みと運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みが同じもの：1.2.3.4.6.7.14

②新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の根来点の読みと運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みが同じもの：8.9.11.12

③新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点・根来点の読みと運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みが異なるもの：5.10.13.15.16.17

④③のうち、運敞『秘蔵宝鑰纂解』と頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』の読みが同じもの：5.10.13.15.16.17

新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』と運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みを比較すると、①にみられる通り、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点と同じ読みをするものが七箇所、②にみられる通り、根来点と同じ読みをするものが四箇所ある。また、③にみられるように、頼瑜点・根来点のいずれとも異なる読みをするものが六箇所ある。したがって、運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みは、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点・根来点のいずれかを重視したものではなく、頼瑜点・根来点を適宜選択したものだといえる。さらに③④をみる限り、運敞は、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』のみならず、他の史料（少なくとも頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』）も参照し、校合したことが読み取れる。

（二）表(2)について

表(2)は、運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みと、堅康本『秘蔵宝鑰』の読みとを比較検討するものである。この検討によって、運敞の読みが堅康本『秘蔵宝鑰』に伝承されているのかを確認することができるであろう。

表(2)

	賴瑜『秘蔵宝鑰勘註』	新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』	運敞『秘蔵宝鑰纂解』	堅康本『秘蔵宝鑰』
1	口を焔(もや)して	口を焔(ほのお)にし	口を焔し	版:口を焔して 朱:口を焔し
2	愚にあらずして何ぞ	賴:愚にあらずや何ん 愚にあらずして何ぞ 根:愚にあらずして何ぞ	愚にあらずして何ぞや	版:愚にあらずして何ん 朱:愚にあらずして何ぞ
3	野に亘れば	野を亘れば 野に亘れば	野に亘れば	版:野を亘れば 朱:野に亘れば
4	獒犬走れば	獒犬走れば 獒犬走って	獒犬走って	版:獒犬走れば 朱:獒犬走って
5	縁に遇うときは	縁に遇うときは 縁に遇えば	縁に遇えば	版:縁に遇うときは 朱:縁に遇えば
6	愚ならず	愚にあらず	愚ならず	版:愚にあらず 朱:愚ならず
7	未だ有らず、此れを棄てて 能く得るものは	賴:未だ此れを棄てて 能く得ということ有らず 根:未だ此れを棄てて 能く得るもの有らず 未だ此れを棄てて能く得ること有らず	未だ有らじ、此れを棄てて 能く得るものは	版:未だ有らじ、此れを棄てて 能く得るものは 朱:未だ此れを棄てて 能く得るものは有らじ
8	貪瞋の毒を解(げ)して	賴:貪瞋の毒を解(さと)って 根:貪瞋の毒を解して	貪瞋の毒を解して	版:貪瞋の毒を解して 朱:貪瞋の毒を解って
9	粟散輪王	粟散と輪王と	粟散輪王も	版:粟散輪王も 朱:粟散と輪王と
10	医王と工人と	医王と工人と	医王工人	版:医王と工人と 朱:医王工人
11	諸の外道等亦た	諸の外道等も亦た	諸の外道等亦た	版:諸の外道等も亦た 朱:諸の外道等亦た

12	伝授修行者を	頼：伝授修行の者を 根：伝授修行者を	伝授修行の者を	版：伝授修行者を 朱：伝授修行の者を
13	展転上生し	展転して上生す	展転上生し	版：展転上生し 朱：展転上生す
14	非想を射（い）れども	非想を射れども	非想を射れども	版：非想を射（しゃ）すれども 朱：非想を射れども
15	力尽きて即ち下（くだ）るが如し	頼：力尽きぬれば即ち下るが如し 根：力尽きぬれば即ち下（お）つるが如し	力尽きて即ち下るが如し	版：力尽きて即ち下るが如し 朱：力尽きぬれば即ち下つるが如し
16	皆な満ず	頼：皆な満ず 皆な満つ	皆な満ず	版：皆な満つ 朱：皆な満ず
17	分別を無分別とす	頼：分別をも無分別とす 分別を無分別とおもえり 根：分別をもて無分別とをもて	分別を無分別とす	版：分別を無分別とす 朱：分別を無分別とおもえり
18	真言法教の道	頼：真言法教の道も 根：真言法教の道は	真言法教の道は	版：真言法教の道 朱：真言法教の道は
19	煩悩尚お存して	頼：煩悩尚お存せり 煩悩尚お存し	煩悩尚お存し	版：煩悩尚お存し 朱：煩悩尚お存して

運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みと堅康本『秘蔵宝鑰』の読みを比較すると、次のようになる。

（1）運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みと堅康本『秘蔵宝鑰』の朱書きの読みが同じもの：1.3.4.5.6.10.11.12.14.16.18

（2）運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みと堅康本『秘蔵宝鑰』の印字された読みが同じもの：7.8.9.13.15.17.19

（3）運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みが堅康本『秘蔵宝鑰』の朱書き・印字された読みのいずれとも異なるもの：2

（1）の十一箇所は、運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みと、堅康本『秘蔵宝鑰』の印字された読みは相違するものの、朱書きによって『秘蔵宝鑰纂解』の読みが反映されている箇所である。（2）の七箇所は、運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みと、堅康本『秘蔵宝鑰』の印字された読みとがそもそも同じものである。すなわち、堅康本『秘蔵宝鑰』

には（3）の一箇所を除いて、運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みが、印字・朱書きの違いはあれ反映されているということがわかる。したがって、堅康が活躍した江戸後期の智積院には、運敞の読みが伝承されていたといえるであろう。

ただし問題となるのは、（2）の七箇所である。この七箇所の堅康本『秘蔵宝鑰』の印字された読みは、運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みと同じであるにもかかわらず、さらに別の読みが朱によって併記されているのである。この朱書きの読みは、いったい何に基づいたものなのであろうか。試みにこの七箇所と、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の読みとを比較してみると次のようになる。

❶七箇所の朱書きの読みが新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』にみられるもの：8.9.（13）[13].15.17

❷七箇所の朱書きの読みが新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』にみられないもの：（7）[14].19

❶にみられるように、上記（2）の七箇所の朱書きの多くは、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に記された読みと同じであった。すなわち、この朱書きは、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に基づいた読みであることが推測される。

そもそも、運敞『秘蔵宝鑰纂解』は、運敞が撰述した『秘蔵宝鑰』の注釈書である。対して、堅康本の奥書に「慶安元年五月念日旧点校合以墨加之（朱）今以朱点之　安楽寿院沙門運敞」と記される、堅康が閲覧した運敞の本は、「運敞の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」（現在のところ所在不明）である。したがって、『秘蔵宝鑰纂解』は、「十巻章」書写によって伝承された読みを校合した「運敞の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」よりも、運敞個人の見解が反映されやすい性格であるといえる。つまり、堅康本『秘蔵宝鑰』にみられる朱書きは、この堅康が閲覧したであろう「運敞の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」に基づくものであると推測される。

それでは、❶の堅康本『秘蔵宝鑰』の朱書きの読みが新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』にみられる四箇所、ないし五箇

所の読みは、頼瑜点・根来点のいずれなのであろうか。これを示せば次の通りである。

・❶のうち、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点の読みと同じもの：8.9.17

・❶のうち、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の根来点の読みと同じもの：(13) .15

上記❶のうち、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点の読みと同じものは三箇所、根来点の読みと同じものは一箇所、ないし二箇所であった。したがって、表(1)の①～④において検討した際にも指摘した通り、運敞は新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点の読み、根来点の読みのどちらか一つを重視したのではないことが、ここからも理解されるのである。

七、おわりに

以上、本稿では新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』を手がかりに、頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』、運敞『秘蔵宝鑰纂解』、堅康本『秘蔵宝鑰』とを比較しながら、その変遷を検討してきた。以下にその検討結果を述べていきたい。

まずは、頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』と新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点とを比較し、頼瑜の読みがどの程度新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に反映されているのかを検討した。この両者を比較する限りでは、異なる読みをしていたものが多数見られた。そのため、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の頼瑜点は、あくまでも「賢秀に伝承された頼瑜の読み」と言えるであろう。

一方で、先述した運敞と同様に、『秘蔵宝鑰勘註』は頼瑜が撰述した『秘蔵宝鑰』の注釈書であり、この読みは頼瑜が伝承した「十巻章」の読みとは相違することも大いに考えられる。ただし、頼瑜に伝承された「十巻章」は所在が不明であるため、現時点ではどちらにしても推測の域を出ない。

次に、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の読みと運敞『秘蔵宝鑰纂解』の読みとを比較し、運敞に伝承された『秘蔵宝鑰』の読みについて検討した。その結果、『秘蔵宝鑰纂解』には、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』にみられる頼瑜点と根来点が適宜採用されていた。また、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』にはみられない読みも散見された。このことから、運敞は頼瑜点のみを重要視したわけではなく、根来点やその他の史料の読みをも参照し校合したことを窺うことができる。

最後に、『秘蔵宝鑰纂解』と堅康本『秘蔵宝鑰』の朱書きの読みとを比較することで、堅康に運敞の読みが伝承されているのかを検討した。この比較の結果、『秘蔵宝鑰纂解』の読みは堅康本『秘蔵宝鑰』の朱書きとして多数反映されていたものの、完全に一致していたわけではなかった。そして、両者の読みが相違する箇所の朱書きは、その大部分が新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に見られる読みであることが判明した。

ここから読み取れることは、堅康が伝承した「運敞の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」の読みと、運敞の『秘蔵宝鑰纂解』の読みとが異なるということであろう。新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』と堅康本の奥書によれば、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の読みは運敞に伝承され、その運敞の読みが堅康に伝承されたということになる。このような状況の中で、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』にみられる読みが、堅康本『秘蔵宝鑰』に朱書きとして書き込まれている理由は、堅康が閲覧した「運敞の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」の読みに、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の読みが多く反映されていたためと推測される。

もしそうであるならば、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』は、所在不明の「運敞の書き込みがある『秘蔵宝鑰』」の読みを知ることができる貴重な史料といえる。さらに、堅康本『秘蔵宝鑰』の朱書きは、その読みが伝承されていることを確認できる重要な情報であると評価できるであろう。

当然このことは、より多くの史料を用いて慎重に検討を重ねる必要があるが、まずは『秘蔵宝鑰』巻上を中心に中間報告した次第である。引き続き、巻中・巻下の報告を行いたい。

註

（1）堅康本『菩提心論』（智山書庫二二―四九―一八）一六丁左～裏表紙裏。弘現本『菩提心論』（智山書庫二九―四七―九）、覚本本『菩提心論』（智山書庫二二―四九―二〇）にも同様の内容が読み取れる。

（2）新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』については、山本隆信「十巻章の資料論―読曲の問題を中心として―」（『現代密教』三二・二〇二三）において詳しく論じられている。また、純亮、賢秀の人物情報についても言及されている。

（3）「子貝」とは、三好英樹「中世後期における根来寺僧の修学生活」（日本密教学会第五六回学術大会発表資料・二〇二三年一〇月二一日）によれば、子の刻を告げる法螺貝の音であるとされる。

（4）新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻上（五八八番（み―九六））裏表紙裏。

（5）新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻中（五八八番（み―九六））二八丁左。

（6）新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』巻下（五八八番（み―九六））裏表紙裏。

（7）確定的なことは言えないが、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の奥書ならびに識語を見る限り、頼瑜点は、純亮の史料に基づいたもので、根来点は、根来寺に所蔵されていたと考えられる異本（識語で「別本」とされるもの）に基づいて付されたものと推測される。

（8）頼瑜『秘蔵宝鑰勘註』は、『総本山智積院智山書庫所蔵目録』と『総本山智積院新文庫目録』によれば、智山書庫には計十三部（すべて版本）、新文庫には二部（すべて写本）が所蔵されているようである。本来であれば、これらの史料を申請して用いるべきであるが、今回は閲覧の容易さ等を考慮して、『真言宗全書』巻一一所収の『秘蔵宝鑰勘註』を用いた。

（9）運敞『秘蔵宝鑰纂解』は、『総本山智積院智山書庫所蔵目録』と『総本山智積院運敞蔵所蔵目録』によれば、智山書庫には計十二部（すべて版本）、運敞蔵には一部（運敞自筆草稿本）が所蔵されているようである。本来であれば、これらの史料、特に運敞蔵所蔵の運敞自筆本を申請して用いるべきであるが、閲覧の容易さ等を考慮して、『智山全書』巻七所収の『秘蔵宝鑰纂解』を用いた。

(10) この《声点》の項目に関しては、以下の資料を参考に執筆した。

・観応『補忘記』(『第七回智山・豊山・新義青年会合同結集東京大会記念　新義真言論義資料集』合同結集東京大会実行委員会（一九九五）所収)

・大山公淳『仏教音楽と声明』（一九五九）

・金田一春彦『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館（二〇〇一）

・桜井茂治『新義真言宗伝『補忘記』の国語学的研究』桜楓社（一九七七）

・沼本克明『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る—附・半濁点の源流—』汲古書院（二〇一三）

・沼本克明『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず—字音仮名遣い入門—』汲古書院（二〇一四）

(11) なお、中国語の四声は中古音とよばれる時代の声調に基づいて四種類に分類したものであるが、この四声点の位置は、日本における漢音読みの場合の四声点の位置とおおよそ一致する。日本で最も権威のある諸橋轍次『大漢和辞典』をはじめとする多くの漢和辞典には、中古音を基にした四声点が記載されていることが多いため、呉音中心で読む仏教典籍に見られる四声点の位置は、漢和辞典で見られる四声点と上下逆を示していることが多くなっている。

(12) 例えば、上下の声点の関係によって四声点どおりの博士のままでは読まない「出合」という法則がある。また、そもそも古い時代の実際の音調を知ることは難しい。したがって、当時のアクセントを正確に把握することはできない。

(13) 新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に朱書きの情報はなく、墨書き、すなわち頼瑜点で「シテ」と表記されている。朱書きがないということは、根来点の読みでは「シテ」を読まず、「展転上生す」と読んでいたと判断することも可能である。この場合、13も新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』に示された根来点が反映されたものと考えることもできる。

(14) 新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』の根来点には「未だ此れを捨てて能く得るもの有らず」という読みもある。これは堅康本『秘蔵宝鑰』の朱書きの読み「未だ此れを捨てて能く得るものは有らじ」に類似するものである。この読みで相違するのは、「は」の有無と、「未」の字を再読した読みが「ず」であるか「じ」であるかである。「は」の有無に関しては、一字のみであるため、誤写（書き落とし）の可能性もあるのではないかと指摘することができる。また、「ず」と「じ」の相違については、堅康本『秘蔵宝鑰』には、「未」の字に「シ」とルビが付してあるため、明らかに「有らじ」と読んでいたことが分かるが、新文庫所蔵『秘蔵宝鑰』には、「未」の字にルビが付されていない。したがって、「有らず」・「有らじ」のいずれで読んだのか、ここでは判断ができない。よって、「②七箇所の朱書きの読みが新文庫本にみられないもの」に一応は分類したものの、実には同一の読みであった可能性もあるのではないかと推測される。